

「クリームが作りたい！」< 5歳児 5月泡遊び >

刈谷市立小垣江東幼稚園（愛知県刈谷市）

友達との違いに気付かせていくことで、自分の目的に向かって考えたり試したりした事例
< 創造性の芽生えを育む（考える・試す・工夫する・発見する） >

< 泡遊びのきっかけ >

4月から5月にかけて花をすりつぶしてジュース作りを楽しんできた。その中でC児が「先生、石鹸であわあわができたならジュースにクリームが乗せられるのに」と言ってきた。そこで新たに石鹸を加えることでよりイメージを膨らませ、思いの実現に向けてやりたいことが十分楽しめるように、また遊びの中で水や泡の心地よさを感じてほしいと思った。

5月9日に泡遊びを設定し、C児を含み幼児たちは石鹸を削ることを楽しんだり泡たて器で混ぜる動作を楽しんだりしていた。しかし、色水と泡の設定の場が離れていたこともあり、できた泡と色水とを合わせて遊ぶ姿にはつながらなかった。

< 幼児の姿と教師の願い >

泡遊びの中でそれぞれが石鹸と水を混ぜ合わせている。その中で、自分の泡と友達の泡の様子が違うことに気付き「どうして?」「何が違うんだろう?」と不思議に感じている姿が見られるようになってきたり、「クリームにしたい」と作りたいイメージが明確になってきているがなかなか思い通りにいかなかったりするA児、B児の姿がある。また、繰り返し作るうちにクリームにするにはどうするか分かってきたC児もいる。そこで、友達のしていることに目を向けて比べたり考えたり試したりしながら思いの実現に向けて遊ぶ楽しさを味わってほしい。

< 事例 >

5月25日

幼 児 の 姿 と 教 師 の 援 助

C児の作っている泡がしだいにクリーム状になってきた。

教師「C児ちゃんだんだんクリームになってきたね」と言うとB児「どうしてC児ちゃんのはクリームになっているの? B児もクリーム作りたい」と言う。A児も「私も! 何で? 同じ石鹸を使ってるのにね。混ぜても混ぜてもぜんぜんクリームにならないんだけど」と一生懸命混ぜている。教師も貸してもらい一生懸命混ぜながら「何でかね。こんなに頑張って混ぜてるのにね」と言う。

それを聞いてC児「混ぜてもクリームにならないと思うよ。だって、水が多いんだもん」と泡を見て答える。A児「えー? 水が多いとダメなの? じゃあ、C児ちゃん教えて」と自分の泡を流しに行き、もう一度始めから作り直す。B児も同様に作り直す。教師も「どうやって作るんだろうね? C児ちゃんが何か知ってるみたいだね」と期待を寄せる。C児「最初は水は少しね」と言うが、B児「少して言ってもどれくらい?」と聞く。C児「これに一杯ね」と小さなおたまと水が入ったボールを渡す。

教師「C児ちゃん、ボールに水を入れてそこから汲めば毎回汲みに行かずに済むね。それに小さなおたまだったら少しずつ入れられるしね」と言うと、B児「C児ちゃんありがとう」A児「C児ちゃん頭いいねえ」とうれしそうにお礼を言う。C児も応えるようににっこりする。そして、B児、C児がおたまで水をすくって自分のボールに入れる。B児はおたまにすくった水をザーッと全部入れてしまうが、C児は手先をコントロールしながら少しずつ入れている。

教師「C児ちゃんはすごく慎重だね。どうして?」と尋ねると、C児「だって少しずつ入れないとすぐシャビシャビになるんだもん」と答える。教師「そうなんだ、少しずつ入れて様子を見るんだね」と言うと、それを聞いていたB児が手を止めてC児の様子をじっと見る。そして次は慎重に入れては混ぜ、石鹸を加え、また水を入れてよく混ぜて・・・を繰り返す。

B児もまねして同じように作る。A児「お～、だんだん混ぜるのが重たくなってきたよ」教師「え～、どんな感じ? 混ぜていい?」と借りて混ぜてみる。教師「本当だね、最初のクリームと重さが違うね」と言う。A児「だいたいさー最初のはクリームにならなかったしね」と言う。教師「でもよかったね。本物のクリームみたいになってきて。おいしそう」と声をかけると満足そうにうなずいた。

その後、泡がクリーム状になると、本物のようなケーキ作りに広がっていった。



お花や実を飾って、きれいなケーキにしよう。

<考察と反省>

- ・ なかなかクリームにならないA児、B児の姿より のように声をかけたことで自分とC児を見比べるきっかけになり、自分もクリームが作りたい、どうやって作るの? などとより一層興味や目的をもって見たり聞いたりすることにつながったと感じた。
- ・ A児、B児は、自分たちでC児にどうしたらクリームになるのかを聞き、C児にとっても知っていることを友達に伝える経験もできた。その中で のようにC児の行動を具体的に言葉にし、受け止めたことでB児たちにとってC児が自分のためにしてくれているということを感じ取り素直にお礼を言うなど友達のよさにも触れることができたと思う。
- ・ 同じ“おたまにすくって入れる”という動作ひとつをとってもB児とC児とでは入れ方が違っていた。教師が のようにさりげなく気付かせられるきっかけとなる声かけをしたことでB児はじっとC児の姿に見入ってどこが慎重なのかを自分で発見し、まねて作ることにつながったのだと思う。
- ・ 全体的に教師が見守ったり声かけをしたりすることが多く、教師と一緒にという援助に欠けてしまったように感じる。もっとC児の教えてくれたことを教師もA児たちと一緒に試していくことでクリームが出来上がったときにより喜びに共感したり、C児にとっても教師に自分の考えを認めてもらえたという満足感を与えたりすることができたのかもしれないと感じた。

みどころ

「石鹸であわあわができる」ということをイメージできる経験がある幼児は、保育者に思いを伝えることができるので、思うようなクリームになるように試行錯誤を繰り返して遊びの展開を楽しんでいます。同じ場においても、泡でクリーム状にすることに興味を持ち、友達のしていることに目を向けている幼児もいます。友達と同じものを同じように使いながら、自分の泡との様子が違うことに気付き「どうして?」「何が違うんだろう?」と不思議に感じている子どもたちもいます。比べたり考えたり試したりしながら次第に「クリーム状にしたい」という思いが強くなっています。同じ遊びの場で、こうしていろいろな子どもたちの姿が見られますが、子どもたちの実態に沿った教材により、子どもたちはみんな、それぞれの思いの実現に向けて遊ぶ楽しさを味わっています。